心に残る映画

『海賊とよばれた男』

2016 年／日本／山崎貴監督作品

「海賊とよばれた男」に学ぶべき魂

会員　井川 憲太郎 (61 期)



「海賊とよばれた男」
Blu-ray 発売中
発売元：ソニー・ミュージック ソリューションズ
ⓒ 2016「海賊とよばれた男」製作委員会
ⓒ百田尚樹／講談社

近年のイランとアメリカの緊張高まる情勢において、ホルムズ海峡が閉鎖された際、ある国内の石油会社のタンカーだけが無事に通過できたというニュースを聞いた時の衝撃は、今でも忘れられない。世界中の船舶が足止めを食らう中で、かつて培われた固い信頼ゆえに通過を許されたという逸話を聞いた瞬間、私の脳裏にある一本の映画の光景が鮮やかに蘇った。それが「海賊とよばれた男」である。

この映画に馴染みがない方に説明すると、これは実在する企業家をモデルにした主人公・国岡鐵造の激動の生涯を描いた作品だ。物語の最大のクライマックスは、終戦直後に起きた実話に基づくエピソードである。当時、巨大な石油資本（メジャー）や英国によって石油の輸出を封鎖されていたイランへ、鐵造は自社のタンカーを極秘で派遣した。船の拿捕、会社倒産、世界的な圧力といった絶望的なリスクを跳ね返し、見事に石油を買い付けて日本へ持ち帰ったのである。

私自身、弁護士という職業柄、普段は冷徹ともいえるような論理と法条文の世界で生きている。契約書等のリスクを徹底的に排除し、安全な解を導き出すことこそが職責であり正義だと考えてきた。しかし、法律家の目で見ればあまりに危険で無謀に見える鐵造の決断の裏にあったのは、単なる利益追求ではなく、「日本の復興と国民の生活を守り抜く」という決意であった。劇中で創業者精神として掲げられる「人間尊重」や「大家族主義」という熱い信念が、鐵造の姿を通して胸に迫ってくる。

あのホルムズ海峡で日本の船が特別な信頼を得て無事に海を渡れたという現実のニュースは、モデルとなった先達が命懸けで築いた現地との信頼関係と真摯な敬意の歴史が、半世紀以上の時を超えて今なお生き続けていることを証明していた。法や契約書等といった表面的なルールを超えたところで、人間同士の「圧倒的な熱量と真心の信頼」こそが、時に国際政治の荒波や法的な壁すら打ち破る力を持つことを痛感させられた。

昨今の国際情勢を見渡せば、従来のルールや論理だけでは解決できない不条理な事態が多発している。前例のない混乱が続く混迷の現代において、私たちはともすれば保身に走り、リスク回避の言い訳を探してしまいがちだ。私自身も弁護士として、安全地帯から「リスクがあるから難しい」と助言することに慣れてしまっていなかったか、深く自問させられる。

だが、正しい論理だけでは打開できない不条理に直面したとき、私たちを前へ推し進めるものは何だろうか。それこそが、国岡鐵造が見せたような「熱き魂」なのだと確信している。泥をかぶることを恐れず、仲間を思い、己の信念に命を懸ける。そんな熱い生き方にこそ、この混迷の時代を切り拓いて力強く生き抜く術が隠されているのではないか。法曹界に身を置く一人の弁護士として、この映画は人生で真に大切にすべき「覚悟と熱き魂」を思い出させてくれた、深く心に残る至高の一作である。